ものぐさ赤ずきんちゃん

みねらる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ものぐさ赤ずきんちゃん

【Ｎコード】
Ｎ１９３６Ｄ

【作者名】
みねらる

【あらすじ】
むかしむかしあるところにみんなから「赤ずきんちゃん」と呼ばれている可愛い女の子がいました。でもその女の子はちょっとものぐさでした。超ものぐさな赤ずきんと不愉快な仲間たちの不愉快な物語

（前書き）

つたない文章ですが失礼いたします。赤ずきんちゃんの世界観が大好きだという方は見ない方がいいと思います。お暇つぶしにでもなれば幸いです・・・。

むかしむかし、あるところにとても可愛らしい女の子がいました。
女の子はおばあちゃんの作ってくれたお気に入りの赤い頭巾をいつもかぶっていたのでみんなから赤ずきんちゃんと呼ばれていました

「赤ずきんちゃん？いるんでしょ赤ずきんちゃん～？」
お母さんがよんでいます。

「赤ずきんちゃん～赤ずきんちゃん！赤ずき…くぉら赤ずきんっっ寝たフリしてたってバレバレよ」

お母さんがブチ切れたので仕方なく赤ずきんちゃんはコタツからのそりと顔を出しました。

「赤ずきんちゃん、お使いをお願いしたいのよ。森の向こうの病気のおばあちゃんにこのパンとお菓子を届けてちょうだい」
そう言って優しい笑顔を浮かべたお母さんはいいにおいの立ち上るバスケットを差し出しました。

赤ずきんちゃんはロコツに思いっ切り嫌な顔をしてやりました。

「私昨日村のみんなと飲み会で二日酔いなんですが。それにおばあちゃん病気じゃないし、ゲートボールしすぎの筋肉痛。ていうかもう正直赤ずきんちゃんとかいうあだ名キツイから。イタイから。そもそもずきんかぶってたのいつの話しですか、今私いくつだと思っ

てんですか」

「早く行けよ」

「行ってきます」

ぼそぼそと御託並べるのを諦めて、御歳２１になる赤ずきんちゃんはしぶしぶとバスケットを手にとりました。

「おばあちゃんの作ってくれたずきんちゃんとかぶりなさいね」

「ん・・・」

「おばあちゃんによろしくね」

「ん・・・」

「つまみ食いしちゃダメよ」

「ん・・・」

「森にはオオカミが出るから気をつけてね」

「ん・・・え？」

いやいや気をつけようがないでしょうが！

という訴えはさらりとスルーです。

「行ってらっしゃい」

あーもぅすごいめんどくさいわぁ。ぼやきながら赤ずきんちゃんは森の中へ入りました。
いくらも歩かないうちに後ろから優しげな声がかかります。

「お嬢さんどこ行くの？」

・・・・・・・・・・。

すたすた

「あれ？お、お嬢さん？そこの赤い頭巾かぶったお嬢さん」

・・・・・・・・・・。

すたすたすた

「ちょ、え、あのっ赤い頭巾かぶって大股で歩いてるお嬢さんっっ」

・・・・・・・・・・。

すたすたすたすた

優しげな声は涙声になりました。

「ねぇっ赤い頭巾かぶって大股で歩いてるバスケット担いだお嬢さんっってばっ」

その声に赤ずきんちゃんはチッと小さく舌打ちして振り向きました。

「この流れから行くと話しかけてくるのはオオカミでしょうが」

ほんとめんどくさいっと詰る彼女に声をかけてきたオオカミさんは涙眼をさらに麗しましたが、勇気を出して尋ねます。

「どこへ行くの？」

「病気（という名の筋肉痛に苦しむ）おばあちゃんトコ」

赤ずきんがちゃんと応えてくれたことに勇気を得てオオカミは気を取り直して言いました。

「お見舞いだね、それならお花がいるよ！とってもいい場所知ってるんだっ」

なんということでしょう悪いオオカミはそう言って赤ずきんちゃん

を足止めし、先におばあさんを食べてそのあと赤ずきんちゃんも食べてしまおうと考えたのです！

オオカミは内心ほくそ笑みます。

何も知らない赤ずきんちゃんは言いました。

「めんどくさいからいいデス。」

すたすたすたすた

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

いやいやいや！

「困るよそんなのっいいからっとりあえず来てよ！じゃなきゃ話が進まないよ！！」

オオカミはわしっと赤ずきんちゃんに縋り付くとそのまま力づくでお花畑に連れて行きました。

「おまわりさーん人攫いに連れて行かれそうですーー。」

「半端無く人聞き悪いよ！！！」

困るとか誰の事情だよ知らないよ二日酔いで頭痛いんだから帰らせてよ

ぼそりぼそりと文句垂れ流している赤ずきんちゃんをオオカミはやっとの思いで自分のお気に入りの場所に連れてきました。

「ほら見て！すごいでしょう！！」

そこは本当に素晴らしいところでした。色とりどりの花々が日の光を浴びて瑞々しく咲き誇っています。

まるで絵画のような風景にオオカミはほぅっと溜息をつきました。赤ずきんちゃんもそれは感動しているだろうと期待して振り向くと彼女は花にはいかにも興味が無い様子で、足もとにいた昆虫を、うわっ気持ち悪〜〜！！と蹴っ飛ばしているところでした。

オオカミは今度こそ本当に哀しくなりました。

「じゃあ・・・がんばって摘んでね。」

がっくりと肩を落としたオオカミはおばあさんを食べるべくそこを去りました。

「はぁ・・・」

近くの切り株に座って赤ずきんちゃんはひとまず休憩をしました。
ついでにバスケットに入ったお菓子もつまみ食いしました。

そして数分もたたないうちによっこらせと重い腰を上げます。
結局一本も花を摘むことはなく、赤ずきんちゃんは早々にそこを立ち去ったのでした。

＊

さておばあさんの家です。
オオカミは乱暴に扉を開けるとおばあさんがゲートボールのクラブを振り回して遊んでいました。
しかしそこにオオカミがいることに気付くとはっとクラブを手放し、いそいそとベットにもぐりこみます。
そしてごほっと辛そうな咳をしてこう言いました。

「おやおや、何か用ですか・・・？私は今具合が悪くて・・・・。」
「いや今あんたなんか振り回してたやん！！」

間髪入れずに突っ込みながらオオカミは思いました。

なんなんだよこの家族〜〜

ちっと舌打ちしておばあさんはベットから出てくると「仮病してるとご飯届けてくれて楽なのよねぇ」とかなんとか言っている。
赤ずきんちゃんのものぐさは遺伝的要素が濃いようです。

「それで、ご用件はなんだったでしょうかねぇ」

ここは赤ずきんちゃんと違うところですが、人好きのする笑顔でおばあさんは尋ねました。

その笑顔にちょっと胸を痛めながらオオカミは腹を括ります。
精一杯怖い顔をしておばあさんを丸呑みにするべく大きく口を開きました。

「あんたを食べに来たのさ！！！」

「きゃぁあああ！！」

＊

赤ずきんちゃんはおばあちゃんの家の前で途方に暮れていました。
「おばあちゃん寝てたら楽なんだけど・・・」
起きていたら昔話に付き合わされてなかなか帰れませんが、寝てい

ればバスケットを枕元においてとんずらできます。

ひとまず中の様子を見ようと赤ずきんちゃんは窓から中を覗きました。

そして・・

「あんたを食べに来たのさ！！！」

「きゃぁあああ！！」

今まさに大口を開けたオオカミとばちりと目が合いました。

＊

「あら、赤ずきんちゃん早かったのね」

ただいまー。と気だるげに帰って来た赤ずきんちゃんの手元を見てお母さんは首をかしげます。

「バスケットそのまま持って帰って来たの？おばあちゃんお留守だった？」

その問いに、家にはいたよと返事して赤ずきんちゃんは頭巾を首から外しつつこともなげに言いました。

「お取り込み中だったので。」

ものぐさ赤ずきんちゃん（完）

おまけの「その後」

赤ずきんとばちりと目が合ってオオカミはしまったと内心舌打ちしました。
これじゃ計画はおじゃんだ。悠長に会話をしているんじゃなかった。

ところが赤ずきんちゃんはこの惨状を見たにも関わらず、まるでそこには何もなかったかのようにくるりと踵を返すとまたすたすたと歩き去ったのでした。

「・・・・あれ？」

ちょっとどういうこと？助ける気もなし？花も摘んでないみたいだし。

オオカミは大口を開けたままでポカンと固まりました。そろそろ顎も痛いです。

なんだかおばあさんが可哀想になって食べるの止めようかとそのま

まの体勢で思案していると

ぽかん！！

小気味よい音とともにオオカミの意識ははるかお花畑へ飛びました。

「あ～危ない危ない」
ゲートボールのスティックを手に持ったままおばあちゃんはふぅと一息つきました。

オオカミがモタモタしている間に取りに行っていたのです。

その時またバタンと無遠慮に扉が開かれ銃を担いだ男が飛び込んできました。

「おばあさん！！無事かっ今変なフードかぶった女の子がここのおばあさんがオオカミに食べられかけていると聞いて・・・・・はっ！！」

飛び込んできた狩人の男はおばあちゃんを見て立ち尽くしました。

「え・・？」

そして彼を見たおばあちゃんも立ち尽くしました。

二人は一目で恋に落ちました。

狩人はおばあちゃんの手を取ります。

「おばあさん、ぼくの丸太小屋へ来ていてただけますか？」

おばあちゃんは恥ずかしそうに頬を染めて頷きます。

「ええ、主人が亡くなってかれこれ３０年こんな日を待ってました。喜んで。」

そうして二人は末永く幸せに暮らしましたとさ。

めでたしめでたし

不運なオオカミ（完）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1936d/

ものぐさ赤ずきんちゃん

2010年10月11日00時00分発行